

肥後医育振興会に期待する

熊本大学病院長 平 井 俊 範



この度、4月1日付けで熊本大学病院長を拝命しました平井俊範と申します。私は1989年（平成元年）に熊本大学医学部を卒業後、熊本大学の放射線科に入局し、大学病院並びに関連病院で放射線科医として研鑽を積みました。2015年3月に宮崎大学医学部放射線医学教室の第3代教授となり、2020年9月に母校の放射線診断学講座の第5代教授に着任し、放射線科診療、研究、教育に取り組んで参りました。その後、2022年から病院長特別補佐、2023年から副病院長を拝命し、働き方改革担当として病院運営に携わり、現在は熊本大学病院長として、その責任の重さを実感しながら、日々職務を遂行しているところです。

さて、熊本大学病院は、細川藩の細川重賢公が1756（宝暦6）年に設立した藩校（医育寮）の再春館に始まり、1871（明治4）年に藩立の古城医学校・病院となり、長い歴史と伝統を受け継いできました。日本近代医学の父である北里柴三郎博士も古城医学校で医学教育を受けられています。令和6年は北里柴三郎博士の顕彰記念として、当院外来診療棟玄関に北里柴三郎博士と恩師のオランダ人医師マンスフェルト先生のレリーフ像が展示されました。また、令和6年3月31日に熊本城ホールシビックホールにおいて、肥後医育塾特別企画として「北里柴三郎記念イヤー2024記念講演会」が開催されました。

オランダ人医師マンスフェルト先生は明治4年（1871年）から3年間、熊本大学医学部の前身である古城医学所および病院で基礎医学と臨床医学を教えられ、北里柴三郎博士のほか、東京帝国大学日本産婦人科学教授の浜田玄達、東京帝国大学医科大学初代衛生学教授の緒方正規などを育てられました。マンスフェルト先生の功績を顕彰し、若手医師の研究を奨励するためにマンスフェルト賞が熊杏会と大学病院の合議で作られ、第1回授賞式が令和6年2月22日に肥後医育

ミュージアム内で挙行されました。肥後医育振興会には寄付の窓口をしていただき、この場をお借りして御礼申し上げます。

現在、大学病院は医師の働き方改革、人件費・物価の高騰など病院経営に関わる大きな課題に直面しています。働き方改革を進め、職員の残業時間を減らしながら更なる運営効率を向上させる必要があります。また、熊本県で唯一の特定機能病院であり、高度先進医療を推進しながら、地域医療における「最後の砦」としての責務を果たしていきます。そして超高齢化、新興感染症、激甚災害など急激な医療ニーズの変化に対応できる医療人を育成し、産学連携や国内外の研究施設との共同研究を積極的に行いトップクラスの研究を推進して参ります。

肥後医育振興会は、熊本における医学研究、医療の充実、市民への正しい医学情報を提供することを目的に活動され、「肥後医育塾」、「熊本県医療人育成総合会議」、「肥後医育振興会医学研究助成」、「肥後医育振興会外国人留学生奨学助成」、「医学研究会・研修会等への助成」など熊本の教育、研究に係る事業を展開されています。今後もこれらの事業を継続していただくことを期待します。また、熊本大学病院の課題として、専攻医が減少していることが挙げられます。肥後医育振興会におかれましては是非とも専攻医を増加させる事業を立ち上げていただくことを強く望みます。

熊本大学病院は全職員が丸一丸となって、診療、教育、研究を発展させ、地域と世界に貢献することを目指す所存です。肥後医育振興会におかれましては、是非ともご理解とご支援を賜りますように何卒よろしくお願い申し上げます。